

スペイン語の接続法

El subjuntivo español

原 誠
Makoto HARA

0. まえがき

1991年5月18、19の両日上智大学で開催された第28回日本ロマンス語学会大会の統一テーマは「接続法について」であった。日本のスペイン語界での接続法の権威は今や衆目の一致するところ神戸市外国語大学の福島 教隆氏である。そこで筆者は早期に同氏に「スペイン語の接続法について」の口頭発表をお願いしたのだが、同氏からは残念ながら1991年4月から1992年3月までスペイン国マドリッドで研究に専念するのご返事をいただいた。ロマンス語学会大会で統一テーマが「接続法」であり、しかもスペイン語界を代表してどなたも口頭発表をしないとすると、これはあまり褒められた話ではないと筆者は考え、事務局に対し、「もしスペイン語を代表して他にどなたも発表をなさらないのなら仕方なく私がやります」と通知しておいた。そうしたら筆者の悪い予感が当たってしまったのである。従って本稿は当日筆者が口頭発表した時のハンドアウトを後になって文章化したものであるが、正直言ってあまり筆の進み具合はよくなかった。しかし筆者はあくまで福島氏の代役であり、本稿の主たる目的は同氏の接続法に関する革新的な提案を日本のロマンス語学界に紹介することにあると割り切って本号に投稿するしだいである。

1. 活用形

1.1. 接続法現在形

活用形の例として AR 動詞からは hablar (話す), ER 動詞からは comer (昼食をとる; 食べる), IR 動詞からは vivir (住む; 生きる) を選んだ。また接続法現在の各活用形の右側に参考のため、直説法現在の活用形を掲げておく。

AR 動詞		直説法現在			
hable	hablemos	hablo	hablamos		
hables	habléis	hablas	habláis		
hable	hablen	habla	hablan		
ER, IR 動詞		ER 動詞		IR 動詞	
coma	comamos	como	comemos	vivo	vivimos
comas	comáis	comes	coméis	vives	vivís
coma	coman	come	comen	vive	viven

1.2. 接続法過去形

これには RA 型と SE 型の 2 種類があり、前者はラテン語の直説法過去完了形に、後者はラテン語の接続法過去完了形にそれぞれ由来している。両者の用法の違いはほとんどない。従って RA 型しか用いない中南米のスペイン語の方が、両型を無差別に用いるスペインのスペイン語より合理的であると言える。

RA 型		SE 型	
hablara	habláramos	hablase	hablásemos
hablaras	hablarais	hablases	hablaseis
hablara	hablaran	hablase	hablasen

ER, IR 動詞

RA 型		SE 型	
comiera	comiéramos	comiese	comiésemos
comieras	comierais	comieses	comieseis
comiera	comieran	comiese	comiesen

1.3. 接続法未来形

ラテン語の直説法未来完了形に由来し、現今では法律の条文や一部の諺以外はまったく用いられない。

AR 動詞		ER, IR 動詞	
hablare	habláremos	comiere	comiéremos
hablares	hablareis	comieres	comiereis
hablare	hablaren	comiere	comieren

2. 接続法の用法

これについては原 誠、1979. スペイン語入門. 東京：岩波書店 の該当部分を参考にして簡単に述べることにする。

2.1. 接続法現在形

2.1.1. 従属節内で従動詞として

2.1.1.1. 名詞節内で

2.1.1.1.1. 目的節内で…「願望, 命令, 感情, 疑惑」の意味をもつ主動詞の従える目的節内で

Manuel desea que Dios le salve. (マヌエルは神が彼を助けてくれるよう望んでいる)

2.1.1.1.2. 目的節内で…「否定; 許可, 禁止」の意味をもつ動詞の従える目的節内で

No creo que Pablo conozca a Amalia. (私はパブロがアマリヤを知っているとは思わない)

2.1.1.1.3. 主部の中に埋め込まれた節の中でその節の意味内容が仮言的な時に用いられる

Es necesario que huyamos del peligro con sagacidad. (我々が頭を使って危険を避けることが必要だ)

2.1.1.2. 仮言的な意味内容の形容詞節 (=関係節) 内で

Querría conocer una persona que estudie más que nuestro amigo José Luis. (我々の友人ホセ・ルイス

以上に勉強する人がいたら知り合いになりたいものだ)

2.1.1.3. 仮言的な意味内容の(「目的, 時, 譲歩, 条件, 否定」を表わす)副詞節内で

El padre de Masao obliga a su hijo a estudiar mucho el español para que vaya a España y luego sea profesor de castellano en Japón. (正男の父は彼の息子がスペインに行き, 後に日本でスペイン語の先生になるようにとうんと勉強させる)

2.1.2. 主節内で主動詞として

2.1.2.1. 願望文・間接命令文中に

Que lleguen aquí pronto. Si no, se les derrite el helado. (彼ら早くここへ来ないかなあ, そうじゃないとアイスクリームが融けてしまう)

2.1.2.2. quizá(s), tal vez, acaso 等の「不確か」を表わす副詞(句)のあとに

Quizás extingan el cáncer, porque son inteligentes y hábiles. (彼らは頭が良く, 有能なので, おそらく癌を絶滅させるだろう)

2.1.2.3. usted(es), nosotros の肯定・否定命令および vosotros の否定命令に

Trabaje usted. (あなた働きなさい)

No trabaje usted. (あなた働きなさんな)

Trabajen ustedes. (あなたがた働きなさい)

No trabajen ustedes. (あなたがた働きなさんな)

Trabajemos nosotros. (我々働こうではないか)

No trabajemos nosotros. (我々働くまい)

No trabajéis vosotros. (君たち働くな)

2.2. 接続法過去形

2.2.1. 時的一致

Manuel deseaba que Dios le salvase. (マヌエルは神が彼を助けてくれるよう望んでいた)

2.2.2. とくに願望文において, 接続法現在形を用いるよりも接続法過去形を用いた方が, 願望される事柄の実現可能性が小であることを表わす。

Ojalá que José tenga éxito en el examen. (どうかホセが試験に合格しますように)

Ojalá que José tuviera éxito en el examen. ([どうせ合格しっこないけれどもそれでも] どうかホセが試験に合格しますように)

2.2.3. ていねいな感じ, 婉曲な感じを表わす。deber, poder, querer の RA 型にしかこの用法はない。

Yo quisiera que usted me acompañase hasta el Museo del Prado. (私はあなたにプラド美術館までついできてもらいたいものです)

2.2.4. 副詞節 como si... (あたかも…のように) の中で

Mary Carmen se porta como si creyera en sus amigas. (マリ・カルメンは彼女の友人を信頼しているかのような態度をとっている)

2.2.5. 現在の事実の反対を仮想する条件文の条件節に用いられ, RA 型でも SE 型でもよい。またその帰結節には直説法過去未来形が用いられるのがふつうだが, 接続法過去 RA 型が用いられることがある。

Si yo fuese Tomás, no haría tantas tonterías. (もし私がトマスなら, これほどまでに愚行を重ねないだら

5)

以上で接続法の活用形と用法の説明を終えるが、この他に複合時制として接続法現在完了形および接続法過去完了形 (RA 型および SE 型) がある。しかし紙面の関係で両者の説明は省略する。

3. ラテン語からスペイン語への接続法の用法の変遷

ラテン語では、動詞が従属節に現れるだけで接続法の形をとるというケースがあった。いまそれらのケースを、樋口 勝彦&藤井 昇. 1991. 詳解ラテン文法²¹. 東京: 研究社出版 から拾ってみることにする。

まず同書の p. 90 に接続法の一般的な意味として、

“接続法はある動作・状態を単に一つの主観的内容として陳述する。従ってその表わすところは願望・危惧・漠然たる未来・要請・仮想・付随状況などである。”

と書かれており、最後の「付随状況」というのがいささか気になるものの、あとはだいたいスペイン語の接続法の用法とさして変わるところがない。

しかし実際には動詞が従属節に現れるだけで接続法の形をとるというケース、つまり上記の接続法の一般的意味では説明できないケースがあまたあるのである。

3.1.1. cum + 過去・過去完了

cum essem ōtiōsus in Tusculānō, accēpi tuās litterās. (キケロ。私がトッスクルムの別荘に静養していたとき、君の手紙を受取った)

この essem という接続法不完了過去 I 人称単数形について、樋口&藤井, 1991はその p. 91 の脚注 2 において、

“「静養していた」のはたしかに事実には違いないけれども、それをただ事実として述べたのではなく、accēpi という事件が起こる時の、写真なら被写体の背景のようなピンボケした周囲の状況として、いわば一種の主観的観照を通して語られているのである。…従ってこの付随状況を示す心持がない時には、cum + 直説法過去 (過去完了) が用いられた。”

と説明している。何だか分かったような、分からないような説明である。しかしいずれにせよこの例において、事実を表わすのに接続法の形が用いられていることだけは確かである。なお筆者はさきほど「付随状況」がいささか気になるのと述べたが、上記引用部分にこの語が出てきており、しかもこの状況の働きによって接続法の形がとられることが分かった。

3.1.2. 原因 (理由)・譲歩を示す接続詞 cum + 接続法 (p. 92)

nihil mē adiūvit cum posset. (キケロ。できたのに少しも私を助けてくれなかった)

事実「できた」のに、posset という posse の接続法不完了過去 III 人称単数形が用いられている。

3.1.3. 間接疑問文にて

mē rogāvit quid facerem. (彼は私に [私が] 何をしているかを訊ねた)

私が何かをしていたことは確かであるにも拘らず、facerem という facere の接続法不完了過去 I 人称単数形が用いられている。

以上従属節に現われただけで従動詞が接続法の形をとる三つのケースを挙げた。これが筆者が § 4. で述べることの重要な伏線となる。

3.2. 主文に用いられる接続法

筆者は愚かにも、スペイン語の *usted(es)* の命令形がずっとのちになって成立したことから推測して、ラテン語には主動詞に接続法の形が現れることは極く少ないと考えていたが、樋口&藤井, 1991の p. 116 によれば、四つものケースがあるとのことである。

3.2.1. 自己を含めた勧誘および願望を表わす

hōs latrōnēs interficiāmus. (これらの泥棒を殺そうではないか)

ita vivam. (かく我生きんことを)

3.2.2. 可能性を考える場合

quid agam? (私は何をしたらいいのだ)

3.2.3. *volō* の代わりに *velim* を用い婉曲な欲求を表わす

hōc velim prōbāre omnibus. (このことを皆に立証してみたいと思うのですが)

velim は *velle* の接続法現在 I 人称単数形である。

3.2.4. 禁止

nē transieris illud flūmen. (その河を渡らないように)

3.3. 筆者の推測

現在のロマンス諸語の接続法の用法を大まかにまとめるならば、「不確かさ」を表わす場合に用いられるとなるだろう。ということは §3.1.1. から §3.1.3. に挙げたような、ラテン語における事実を表わす接続法の用法が段々と消え失せていったということである。となると、現在ロマンス諸語において、多かれ少なかれ接続法が生き延びているのは、そのほとんどすべての用法が「不確かさ」ということで徹底したからこそであると言うこともできるのではなからうか。

4. 事実を表わしているのに接続法の形が現れることもある *el hecho de que...* その他の形式

§3.3. の筆者の推測によれば、スペイン語にはすでに、事実を表わしているのに接続法の形が現れるということはないはずである。ところがわずかながらもそのようなケースはスペイン語にも残っている。「残っている」という表現をいま用いたが、この表現を用いたということは、筆者がこの現象をラテン語時代の類似の現象の名残りと考えていることを意味する。それではスペイン語に残っているその現象の例を、原 誠. 1986. 動詞の時制中心—初級スペイン語. 東京：三修社 の pp. 47-48 から引用してみよう。

4.1. *el hecho de que*

Reconozco *el hecho de que* María sea una sinvergüenza. (私はマリーアが恥知らずであるという事実を認める)

hecho が「事実」という意味であり、その上に Reconozco (私は認める) という、二重に従属節に直説法を要求する語を有しているにも拘らず、*sea* と *ser* (…である) の接続法現在 III 人称単数形が来ている。ただし *sea* の代わりにこの文は *es* が入ってもよい。少なくとも筆者は自由変異だと信じている。

4.2. *la razón de que* その他

これについては別の項目を立てる必要もないかもしれないが、色々な文法書が *el hecho de que* だけを別扱いして論じ、しかも *la razón de que* その他をすべて *el hecho de que* が代表しているような書き振りに憤慨して、*la razón de que* その他を独立させてみた。

Otra *razón de que* hayan decidido esperar está en que desean ver la política que sigue el general

De Gaulle. (彼らが待ってみることに決めたもう一つの理由はドゴール将軍がとる政策を見てみたいということにある)

hayán decidido の部分は動詞 decidir (決心する) の接続法現在完了 III 人称複数形である。決心したのは事実なのであるからここを han decidido と直説法現在完了形を用いても一向に差支えないのである。

4.3. de aquí que + 接続法

桑名 一博 et al. 1990. 西和中辞典. 東京: 小学館 の p. 164 を見ると, de aquí que という熟語見出しのあとに堂々と《+接続法》と書いてある。そして用例は,

Es muy tímido, de aquí que no le guste ir a la escuela. 彼はとても内気だ, そんなわけで学校へ行きたがらない。(注: 下線は筆者による)

と出ている。事実なのに, なぜ接続法の形をとっているのだろう。

4.4. como + 接続法過去形

Como a pesar de la hora temprana sintiéramos calor, fue más bien un goce aquel tamborineo fresco. (R. Güiraldes: Don Segundo Sombra. 早い時刻にも拘らず我々は暑かったので, かの涼しさをもたらす大雨はむしろ喜びであった)

Güiraldes は今世紀初頭に活躍した作家で, しかもアルゼンチン人であるだけに, 表現が古い。現在のスペインだったら, sintiéramos の代わりに, sentir (感じる) の直説法完了過去 I 人称複数形の sentimos あるいは tuvimos (tener [持つ]) の直説法完了過去 I 人称複数形を用いるところだろう。実際我々は暑くてたまらなかつたというのに, 接続法過去形を用いるとはいったいどういうことだろう。ラテン語の名残りの用法と説明するしか手が無いではないか。そう言えば, § 3.1.2. のラテン語の cum の用法と酷似している。

4.5. 接続法の用法のまとめ

このようにしてスペイン語の接続法は, 意味内容の面からだけで100%説明することはできず, 形式の面からの説明も加えねばならないということになった。文法が一元論では割り切れにくいということを示した好例であると筆者は思う。

5. 福嶋 教隆. 1990. EL HECHO DE QUE 節について. イスパニカ. 34. 97-112.

§ 4. で筆者はスペイン語の接続法についての自己の考えを披瀝したのだが, そこへ将来非常に有望な強敵が出現した。神戸市外国語大学の福嶋である。彼は上掲論文の中で, 「el hecho de que 節中の直説法は, 情報を主張陳述し, 接続法は, ある陳述のための前提を表わす」という作業仮説を立て, それを筆舌に尽しがたい努力によって収集したデータに基づいて立証しようとした。直説法が前提を表わし, 接続法が主張を表わすというのなら話は簡単である。ところが少なくとも el hecho de que 節に関する限り, その正反対だと言うのだから, もしそれが事実だとすれば一大革命である。大げさに言うなら, 在来のスペイン語文法教育を根柢から覆しかねない主張である。それでは, 福嶋が苦勞して集めたコーパスの中からいくつか例を拾って紹介しよう。

(4) Por último, y aunque el gesto de la libreta dejaba claro que en Ryuji no había motivación espúrea alguna, quedaba el hecho de que la baja espectacular de los embarques había dado lugar a una quiebra de los valores marítimos, y que por otra parte era evidente que Ryuji tenía intención de acabar con su carrera de marino. (第五に, 貯金帳の件をとってみても, 打算的な男でないことはわかるが, 昨年からのひどい海運不況で, 船会社の株も軒並みに下がっている折りでもあり, 彼のほうでも, ここで船員

稼業の足を洗いたい気のあったことは確かだから、…) (Y. Mishima, J. Z. Goicoechea 訳. 1983. El marino que perdió la Gracia del mar)

(9) “¡Que se casen, pues!” dijo Domitila; “si la niña lo quiere…” El solo hecho de que Domitila aceptara esta idea como algo no imposible, de que permitiera enunciarla, lo que significaba que no era absurda en sí misma, al menos para Domitila, y por lo tanto, que no era totalmente absurda, me produjo un malestar físico. (『好きなら結婚すればいいじゃない』とドミティラは言った。彼女がそう考え、そう口にしたということだけで、他人の目から見ても二人の結婚がまんざらナンセンスではなさそうだということが分かる。私は憂鬱になった) (J. Edwards. 1967. Las máscaras)

(4) では *había dado* と *era* と、*el hecho de que* の中にいずれも直説法が現れているから、福寛説によれば何らかの主張をしていることになる。たしかに *una quiebra de los valores marítimos* (海運株の暴落) と不定冠詞 *una* が付いているし、竜二が船員稼業に終止符を打ちたいと思っているという情報も新しいもののようで、とにかく初出の事実を二つ提示しているのであるから、これを主張ととっても差支えなからう。

(9) では *aceptara*, *permitiera* と二つの接続法過去 RA 型が出ているから、福寛説によれば、何らかの前提となっている事実を表わしていることになる。そう言われてみると、何だかこれらが旧情報であるかのような気がしてくる。

このようにして福寛は合計16例中15例までは前記の作業仮説に適合すると結論し、ただ1例だけは適合しないと正直に述べている。しかも福寛の偉大なところは、さらに念を入れて7人のスペイン語話者に対し上記収集例についてインフォーマント・チェックをおこなっている点である。そしてその結果はやはり前記作業仮説と整合するとしている。

最終的な結論は pp. 108-109 に出ており、それは3項目から成っている。

1. *el hecho de que* 節中の叙法は、いずれか一方に機械的に固定されているのでも、意味の対立を失っているのでもない。直説法と接続法は、同節に意味的な差異を生むと見てよい。
2. 初めに設定した作業仮説は基本的に妥当である。
3. *el hecho de que* 節が直説法をとるときは、他の節に後行することが多く、接続法をとるときは、先行しがちになる。

6. 福寛, 1990に対する筆者の感想

6.1. 結論1について

筆者も *el hecho de que* 節中の叙法は、いずれか一方(直説法か接続法か)に機械的に固定されているとは思っていない。しかし意味の対立を失っている、従って直説法と接続法は、*el hecho de que* 節中に意味的な差異を生むことはないともまだ思っている。と言うとやはり表現が適当でないだろう、福寛説にもっと百歩ぐらい譲った表現をした方がよからう。すなわち *el hecho de que* 節に関する限り、その節中には、かつてはラテン語の用法の名残りとしての接続法も現れえたとし、また事実であるということで直説法も現れえたと。つまり当時は接続法か直説法かの意味の対立はなかったのである。ところが、どういう理由によるものか分からないが、接続法が現れた場合には前提を、直説法が現れた場合には主張をそれぞれ表わすという、両叙法の使い分けに関する在来のスペイン語文法の常識とは正反対の傾向が生じ、現代はその傾向が徐々に勢力を増しつつあると解釈したらどんなものであろうか、それだからこそ少しではあるがまだ福寛の作業仮説では説明できない例が残っているの

であるというふうに。

6.2. 結論2について

§6.1. で筆者は「el hecho de que 節に関する限り」という、非常に限定的な言い方をした。それは福島の作業仮説は、なるほど §4.2. で筆者が出した la razón de que 節にはあてはまってはいるが、§4.3. の de aquí que 節には、その後には必ず接続法の形が来る以上あてはまらない。de aquí que は「それ故に」という意味であるから、後に来る節の動詞は何らかの主張をしているはずである。従って福島の説によれば、直説法の動詞が来ねばならないのに、実際は常に接続法の動詞が来ている。

また少し古い形式ではあるが、筆者が §4.4. で提示した「como + 接続法過去形」にはもちろん福島の説はあてはまるはずがない。それよりも §3.1.2. で筆者が紹介した「原因(理由)・譲歩を示す接続詞 cum + 接続法」の用法が cum が como に変わって生き残ったとした方がよくなるだろうか。

さきほどの福島の説のあてはまった la razón de que 節の例とは裏腹に、en el sentido de que 節ではあるが、筆者は福島の説のあてはまらない例を一つ見つけた。それは Coseriu, Eugenio. 1981. Lecciones de lingüística general. Madrid: Gredos の p. 83 の l. 7 から始まる文である。

Es cierto que, a veces, la anterioridad racional de la teoría se entiende en el sentido de que la teoría fuera 'independiente de los hechos'... (なるほど時には理論が理くつの上で先行するということは、理論が事実から独立していたという意味に解されることがなくはないが、…)

この fuera の部分に福島の説をあてはめると、ser (…である) の接続法過去 III 人称単数 RA 型が現れているのであるから、la teoría 以下の部分は前提になっているはずである。しかし言語学的に言ってこんなバカなことを Coseriu が信じているはずがないから、この場面での Coseriu にとってこの部分は前提であるはずがない。むしろ Coseriu がこの部分をまったく信じていないからこそ直説法の era が接続法の fuera になったのだと筆者は思う。すなわちこの接続法の形は「おれはこんなバカなこと、信じてはいないぞ」という言外の意味を表わしているのである。このようなケースをしも、前提という概念の中に含めるのには筆者はとうてい賛成できない。

むしろ福島の説で、接続法の形が出てくるケースは、言内の意味として話者の心理を表わすことのできる、「感情」の接続法にうまくあてはまるのではなからうか。いまそれらの例を原、1979 の p. 198 から拾ってみる。

El abuelo se alegra de que mañana vengan a verle todos sus nietos. (祖父は明日彼のすべての孫が彼に会いにやって来ることを喜んでいる)

Carmencita siente mucho que sus padres tengan poco dinero. (カルメンシータは彼女の両親にお金が少ししかないことをとても残念に思っている)

最初の例では、祖父のすべての孫が明日彼に会いに来るのは事実である。ところが祖父が嬉しくて嬉しくてそれが信じられないくらいだというので、vienen が vengan と接続法現在形をとっているのである。つまり接続法動詞が福島の説どおりに、前提を表わしている。

第2の例では、カルメンシータの両親が貧乏だという事実があり、そこへ両親が金持であってほしいというカルメンシータの気持が働くので、直説法の tienen が tengan と接続法の形をとっているのである。つまりここでも接続法動詞が、福島の説どおりに、前提を表わしている。

しかしこの「感情」の接続法の用法では、これと対立する、「主張」を表わす直説法の用法が欠けているという点が el hecho de que とは決定的に異なっている。

かようなわけで、福嶋が福嶋，1991の p. 109 おいて3項目から成る結論を出したあとで、

“本稿を結ぶにあたって、「直説法は主張陳述を表わし、接続法は背景素材を表わす」という考え方は、el hecho de que 節のみならず、他の構文の分析にも有効ではないかと思われることを、書き添えておく。”

と言う時、福嶋の更なる成長をだれよりも望んでいる筆者もとうてい賛意を表することができないのである。

6.3. 結論3について

この結論は本稿の主たるテーマに直接関係はない。しかし直説法動詞がもし何かを主張するのであれば、それは新情報であるから、後部に現れがちになり、接続法動詞がもし前提として働くのであれば、それは旧情報であるから、文の前部に現れがちになるのは当然であろう。ただし筆者は未だに新情報だから文の前部に置かれがちだという言葉あまり信じたくない。例外的ケースがあまりに多いからである。

6.4. 結び

俊秀福嶋の好論文にも拘らず、筆者は色々な従属節で当然直説法動詞が現れるべきところに接続法動詞が現れる現象を、以上のような論考の結果、あい変わらずラテン語の用法の名残りと解釈したく思う。またそのように学生たちに教え続けて行くであろう。